

愛知県内における文化芸術の普及啓発に関する調査研究

—小中学校への音楽アウトリーチを例に—

愛知県芸術劇場

2019年3月

一生に一度は劇場に足を運んでほしい

愛知県芸術劇場 館長 丹羽康雄

愛知県芸術劇場は、「つくる」「みる」「ひろげる」「つなぐ・そだてる」「こたえる」「ささえる」の5つのミッションを掲げています。その1つの「つなぐ・そだてる」を達成するため、私たちは『普及教育プロジェクト』を立ち上げ、様々な普及啓発事業を実施しています。

例えば、舞台芸術のトップランナーと劇場スタッフがアートの醍醐味について語り合う『カフェ・トーク』、演劇の台本を音読する『リーディングカフェ』、作品を見終わった後で感想や批評などを共有しあう『レビュー講座』など、初めての方からコアファンまで幅広く、舞台芸術に親しんでいただけるよう工夫を重ねています。

また、子どもたちを劇場に招待する『劇場と子ども7万人プロジェクト』、家族で舞台を楽しむ『ファミリー・プログラム』は、子どもたちの完成や創造力を育むとともに、将来、劇場を身近に感じるきっかけとなります。

さらに、一般財団法人地域創造の支援を受け、県立劇場として、普及啓発事業をどのように発展させていくべきかを考える端緒として、取り組んだ『アウトリーチフォーラム事業 愛知セッション』は、プロのアーティストが学校や地域のホールに出掛け、迫力ある生の芸術を届ける事業です。

普及啓発事業で取り組むべきジャンルや対象は多種多様ですが、今回は、小中学校への音楽アウトリーチを例に県内の実態を把握しました。この報告書をもとに、今後、県内市町村劇場と一緒に、実践の手がかりを考えていければと願っています。

目次

1.はじめに	
1.1 研究の背景 —振興と活用—	
1.2 本研究における問題意識	
1.3 本研究の目的と方法	
2.文化芸術の普及啓発事業に関する愛知県内の実態調査	
2.1 愛知県内の法整備	
(1) 愛知県文化芸術振興条例	
(2) あいち文化芸術振興計画 2022	
2.2 文化施設の実態	
(1) 実施状況	
(2) 実施理由	
(3) 実施効果	
(4) 実施体制	
(5) 担当職員の属性・経験	
(6) アーティストとの関わり	
(7) アウトリーチを学ぶ機会	
(8) 文化施設間の交流	
(9) 愛知県芸術劇場への要望	
2.3 考察 —愛知県内のアウトリーチに関する課題—	
(1) 文化施設間交流の格差	
(2) 文化施設とアーティストの希薄な関係性	
3.愛知県芸術劇場による試行的実施	
—アウトリーチフォーラム事業 愛知セッション—	
3.1 概要	
(1) 関係組織・参加アーティスト・コーディネーター	
(2) 実施内容	
3.2 専門人材の意識	
(1) コーディネーター	
(2) アーティスト	
(3) 分析	
3.3 考察	
4.愛知県立芸術劇場の役割 ～まとめにかえて～	
(1) 劇場間連携の強化	
(2) 人材の育成と派遣 —コーディネーターとアーティスト—	
資料編	

1. はじめに

1.1 研究の背景 —振興と活用—

文化芸術振興基本法の一部が改正され、法律の名称が文化芸術基本法に変更になったのは 2017 年度のことである。文化芸術を観光やまちづくり等と有機的に結びつけ、新たな展開や発展に結びつけようという動きは珍しくない傾向にあったが、法律改正を受けてその動きが加速することは想像に難くない。文化芸術は、振興から活用に向かい始めている。

2001 年に施行された文化芸術振興基本法では、文化芸術の価値に対する国の認識が示され、それを広く振興するよう努めることが義務付けられた。その後 11 年を経て 2012 年に施行された「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」(以下「劇場法」という。)では、劇場や音楽堂等に、建物(ハード)としての役割にとどまらず、人材(ヒューマン)と事業内容(ソフト)を駆使して地域全体を網羅する文化機関として機能するよう努めることが義務付けられた。

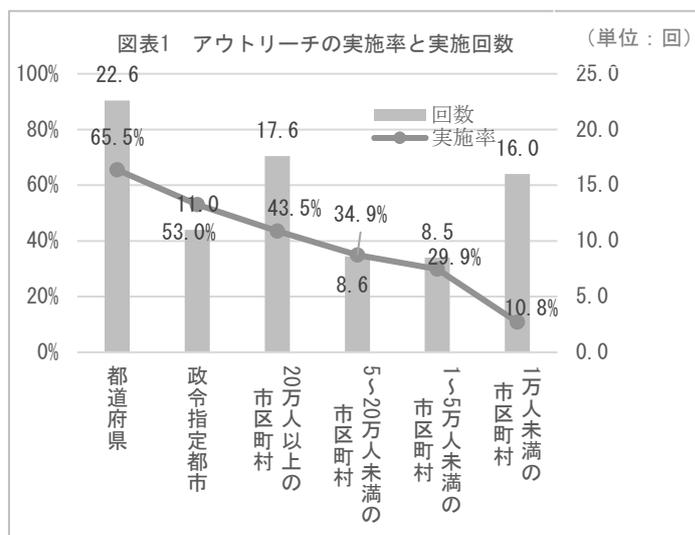
この 2 つの法律を背景に、舞台芸術分野(音楽、演劇、舞踊、伝統芸能等)において文化芸術の振興を目的としたユニークな事業が全国の文化施設で行われてきた。特に普及啓発事業は文化芸術振興基本法制定を待たず 2000 年ごろから増加し、今では、子どもを対象とした公演、館内外でのワークショップ、教育機関等へのアウトリーチ、障がいを持つ人々の鑑賞サポート等、多様な対象者に向けた多様な内容が含まれるようになった。手探りながらも普及啓発事業を継続・定着させ、既に 15 年近い実績を重ねた文化施設がこの愛知県内にもある。

1.2 本研究における問題意識

普及啓発事業は対象や内容の多様さから、実際にそれを実践するアーティスト、創意工夫された内容、事業を推進する多様な能力の人材が必要とされる。また館外活動も多いため、文化芸術以外の政策分野からの理解と協力、各分野との日常的な交流も求められる。

そのためだろうか、「平成 26 年度 地域の公立文化施設実態調査」(一般財団法人地域創造、2015)によれば、自主事業や委託事業として「普及型の鑑賞事業¹」を行っている公立文化施設は 42.2%、「子どもを対象とした事業」は 60.8%、「アウトリーチ」は 38.6%と、すべての文化施設で普及啓発事業が行われているとは決して言えないことがわかる(p.32)。

特に、多様な実施形態の普及啓発事業の中でもっとも実施率の低いアウトリーチは、自治体の規模が小さくなるほどさらに実施率が下がり、政令指定都市で 53.0%行われているのに対し、1 万人未満の市区町村では 10.8%にとどまる。しかし、実施率と実施回数の両者を見てみると(図表 1)、1 万人未満の市区町村では 1 年に 16 回行われているのに対し、政令指定都市では 1 年に 11 回に落ちる。都道府県を除いて、実施率、実施回数共に高い自治体は人口 20 万人以上(政令指定都市を除く)の市区町村だが、実施率は半数に満たない。つまり、実施率と実施回数は比例しておらず、文化施設ごとのアウトリーチ状況に違いがあることが推測される。ゆえに、



出典:「地域の公立文化施設実態調査」(一般財団法人地域創造、2015)

¹ 実施ジャンルは、クラシック音楽、邦楽、ダンス、演劇、伝統芸能、その他、に分類される (一般財団法人地域創造「地域の公立文化施設実態調査」2015、p.33)。

各公立文化施設の実態を把握しないままに実施率の向上を目的にすることは躊躇される。

1.3 本研究の目的と方法

これらの現状を踏まえ、本調査研究では、文化施設ごとの違いを超えることを前提として、愛知県内のアウトリーチ実施率向上と実施回数増加を目的とした「普及啓発事業のための拠点機能の構築」に必要な基礎データの収集と課題抽出を行う。調査方法は、質問紙による調査及びインタビュー調査、参与観察を主とし、適宜文献調査も行う。なお本調査研究においては、アウトリーチを「実施分野を問わず、文化施設以外の場所で行われる芸術に関する活動」と定義する。

2. 文化芸術の普及啓発事業に関する愛知県内の実態調査

2.1 愛知県内の法整備

2018年3月27日に施行された愛知県文化芸術振興条例(愛知県条例第2号)(以下「条例」という。)にも、同年7月17日に施行された「あいち文化芸術振興計画2022」にも、アウトリーチに関連する記載がいくつかある。

(1) 愛知県文化芸術振興条例

同条例は、文化芸術基本法や文化芸術推進基本計画(2018年施行)などの国の動向をとらえながら、文化芸術振興を県の責務として認識し、特に子どもについては「学校での芸術活動」と明記している。以下、引用。

(学校教育における文化芸術活動の充実)

第17条

県は、学校教育における文化芸術活動の充実を図るため、文化芸術に関する体験学習その他の教育の充実、芸術家、文化芸術団体等による学校における文化芸術活動に対する協力への支援その他の必要な施策を講ずるよう努めるものとする

(2) あいち文化芸術振興計画2022

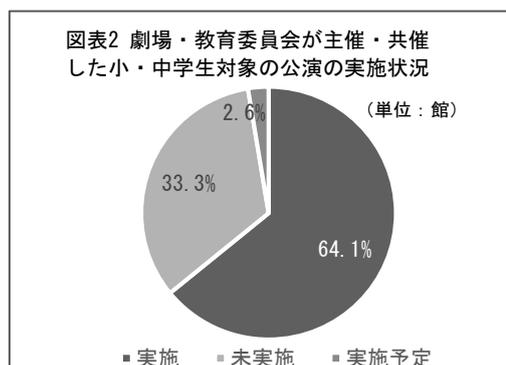
掲げられた9つの基本目標のうち、<基本目標2>に「県民が等しく文化芸術に親しむことができる環境の整備」が示され、そのための鑑賞機会の充実を課題としてとらえ、解決のための具体的な方法としてアウトリーチに触れている。以下、引用。

⑰ アウトリーチ活動等による普及啓発

鑑賞機会の拡大・普段、文化芸術に触れる機会の少ない人や会場に来られない人に、地元の施設、学校、医療機関、福祉施設等で、生の文化芸術を体験してもらうなど、芸術家等によるアウトリーチ活動を促進します。

2.2 文化施設の実態

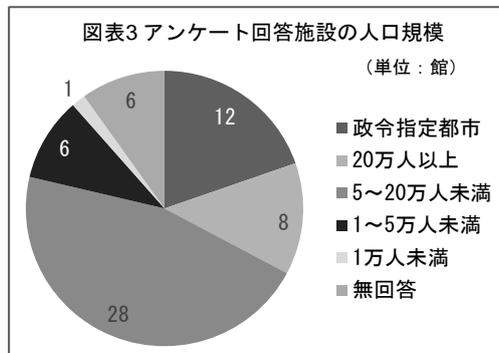
では、現場はどうか。愛知県内の公立文化施設が行う普及啓発事業の実態について、愛知県芸術劇場が小中学生を対象とした事業に限定して調査したところによると、「劇場・教育委員会が主催・共催した小中学生対象の公演」を実施及び実施予



定している文化施設は、66.7%に及ぶという結果が得られた²。全国的な状況(前述、60.8%)に比べると、高い実施率だ。

一方、館外で行われているアウトリーチ事業については、県内の全体像を把握できる調査は行われていない。そこで、愛知県内の公立文化施設を対象に、アウトリーチ実態調査を行うこととした。先の調査結果(図表 1)から、文化施設ごとで異なる状況にあることが推測されたので、詳細を把握するため、記述式を含む質問紙による調査を行った。調査概要は次のとおりである(質問紙は資料編を参照)。

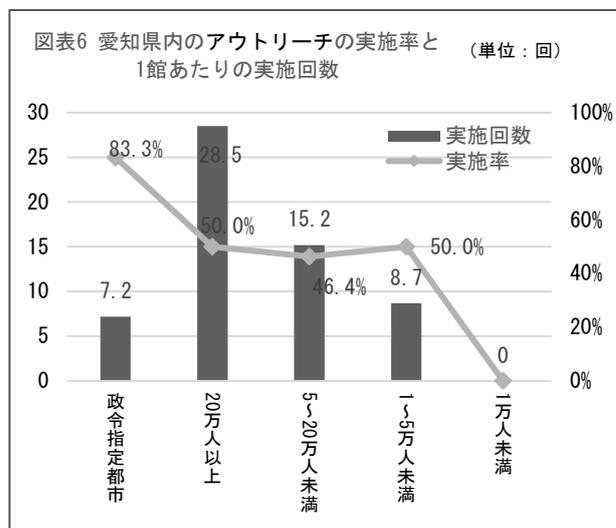
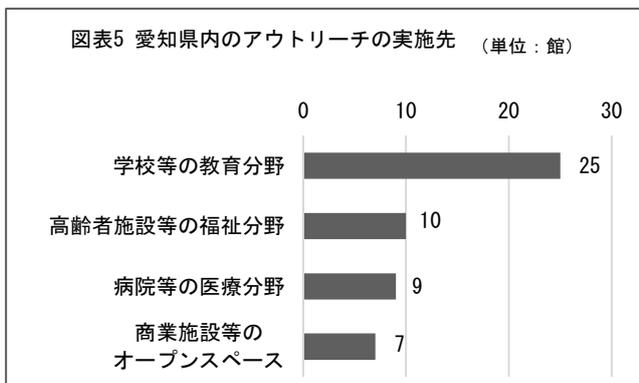
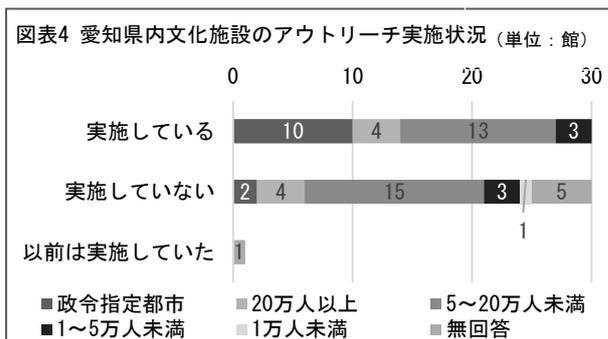
- ・調査対象:愛知県公立文化施設協会所属の公立文化施設 106 館
- ・調査時期:2017 年 9 月～2017 年 10 月
- ・調査方法:郵送法
- ・回収枚数:61 館
- ・有効回答率:57.5%



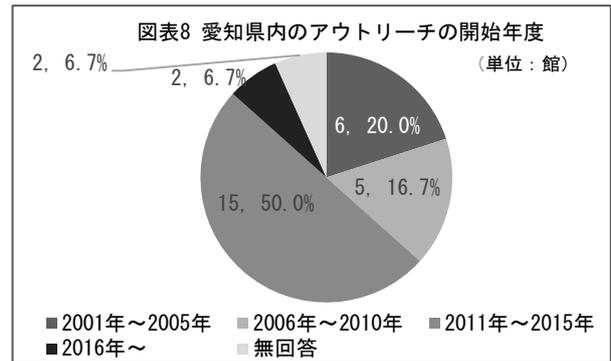
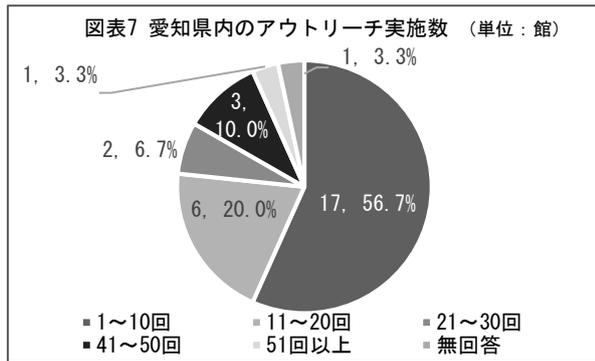
(1) 実施状況

回答施設の 49.2%にあたる 30 館が、音楽のアウトリーチを実施していると回答した。38.6%にとどまる全国の実施率(前述)と比較すると、愛知県内の実施率はかなり高いことがわかる。実施先は、実施施設の 83.3%にあたる 25 施設が学校等の教育分野で実施しているのもっとも多く、その他、9~10 施設が、高齢者等の福祉分野と病院等の医療分野で実施していることがわかった。全国の状況においても学校分野(小学校)が 68.9%ともっとも高いが(一般財団法人地域創造、2015、p.32)、愛知県はとりわけその割合が高いことがわかる。高齢者施設へのアウトリーチにおいても全国平均の 19.6%と比べ 33.3%と高い割合を示しており、愛知県内のアウトリーチ状況は全国に比して活発であることがわかった。

年間の実施回数は1~10回程度が17施設ともっとも多く 56.7%を占めている。もっとも多い文化施設は、84回という結果だった。開始年度は2011年~2015年度がもっとも多く、15施設(50.0%)がこの



² 愛知県芸術劇場調べ(愛知県芸術劇場「劇場と子ども 7万人プロジェクト 2017年度報告書」(2018、p.19))

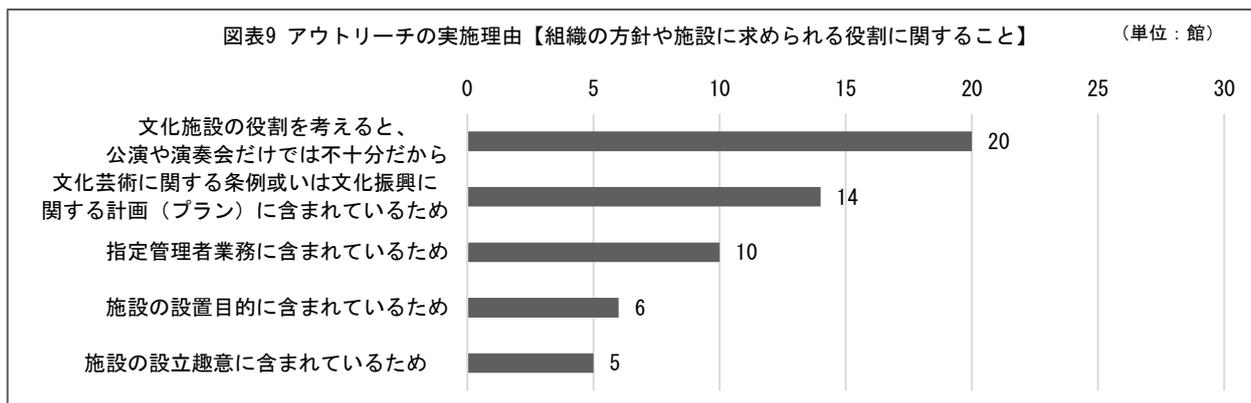


期間にアウトリーチを開始している。またそれまでの10年間で既に11施設(36.7%)がアウトリーチを開始している。

(2) 実施理由

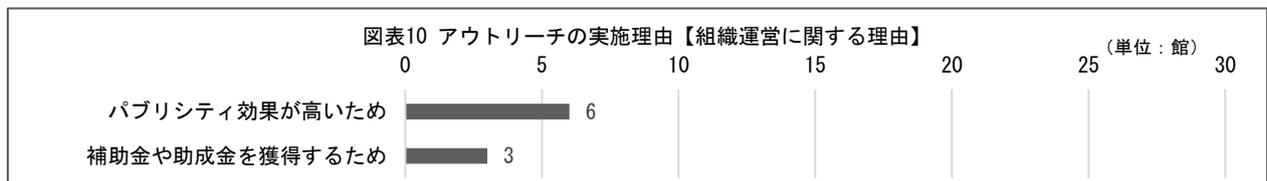
組織の方針や施設に求められる役割に関すること：

実施理由は、設立趣意や設置目的に関わることも、文化施設自体の役割意識が大きいことがわかる。当該地域の文化政策(条例・文化振興計画)を根拠とする場合も比較的多いように見受けられるが、実際には46.6%と半数に達していない³。



組織運営に関する理由：

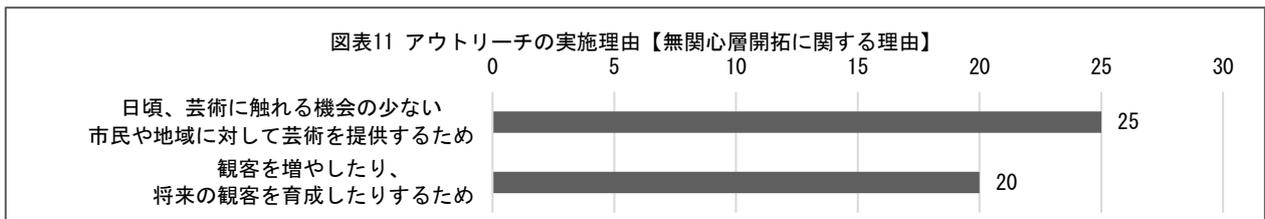
補助金や助成金の対象となりやすい、子どもを対象とした事業の多いアウトリーチだが、そのことが実施理由になることはかなり少ないようである。また、報道されることが少なくない事業だが、それを目的にアウトリーチを実施することも少ないようだ。



無関心層開拓に関する理由：

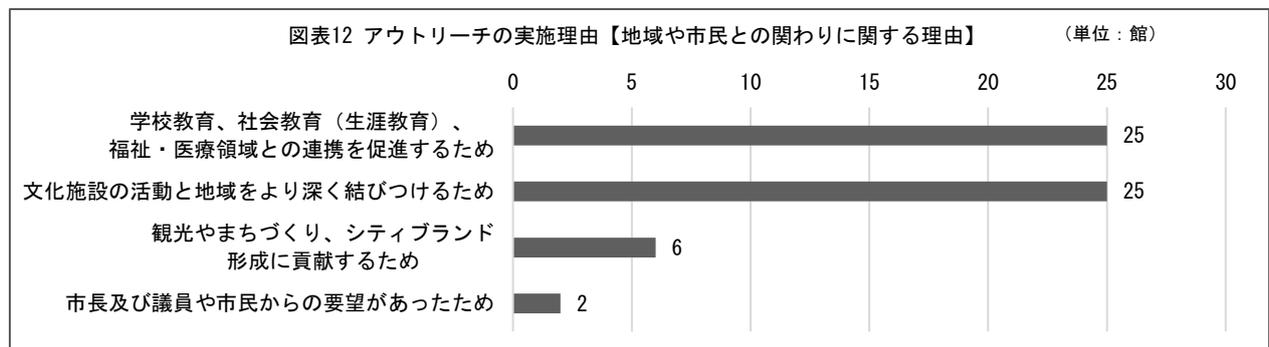
無関心層開拓に対するアウトリーチへの期待を持っている施設はかなり多い。アウトリーチ以外の事業への観客になり得ることへの期待も持っており、当該地域の市民への文化芸術との接触機会の分_割に飽_きど_まらず、興味関心の喚起への期待も含んでいることがわかる。

³ 法整備の有無の質問への回答は、必ずしも正しいものではなかったため、グラフ化しなかった。



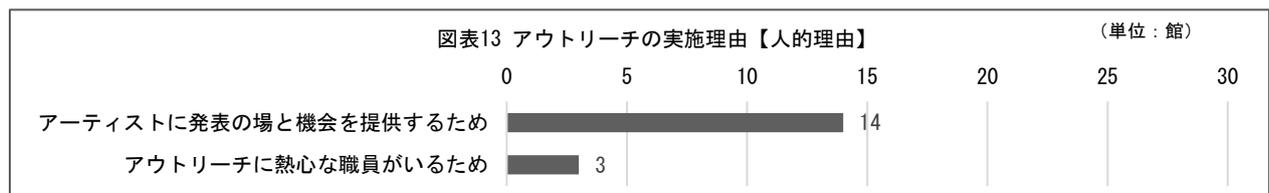
地域や市民との関りに関する理由：

文化芸術以外の政策分野との結びつきの必要性がいわれて久しいが、文化施設内で行われる公演がその役割を果たすことは難しい。これについて、館外で実施するアウトリーチに、文化施設と地域を結びつける媒介的役割を期待していることがわかる。それに反して、文化芸術基本法で結びつきが明示された観光や、自治体が追求すべきシティブランドとアウトリーチを直接結びつける意識は、比較的低いようである。



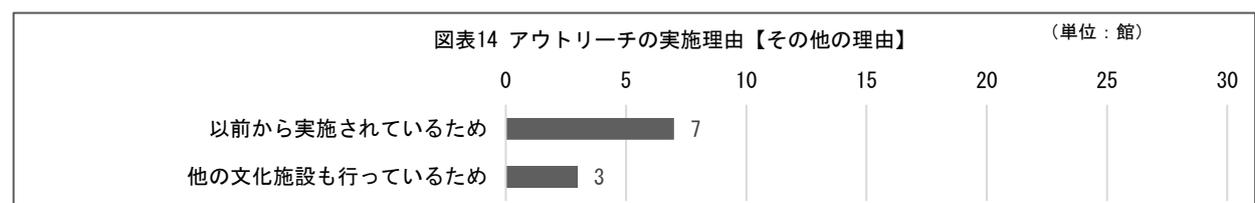
人的理由：

アーティストとの交流や、文化施設職員の意欲が契機になる場合があることがうかがえる。アウトリーチは館外施設や地域の人々との関係性の開拓や強化、参加者とのコミュニケーション、人的交流が基盤になることも多く、文化施設職員の「顔」が見えることが重要だ。また、アーティストと文化施設職員との関係性はアウトリーチの内容や質にも影響するだろう。こういった背景を反映してか、アーティストに現場経験を提供して育成したい意向が文化施設側にあることが推測される。アーティストの育成意識ととらえることができるだろう。



その他の理由：

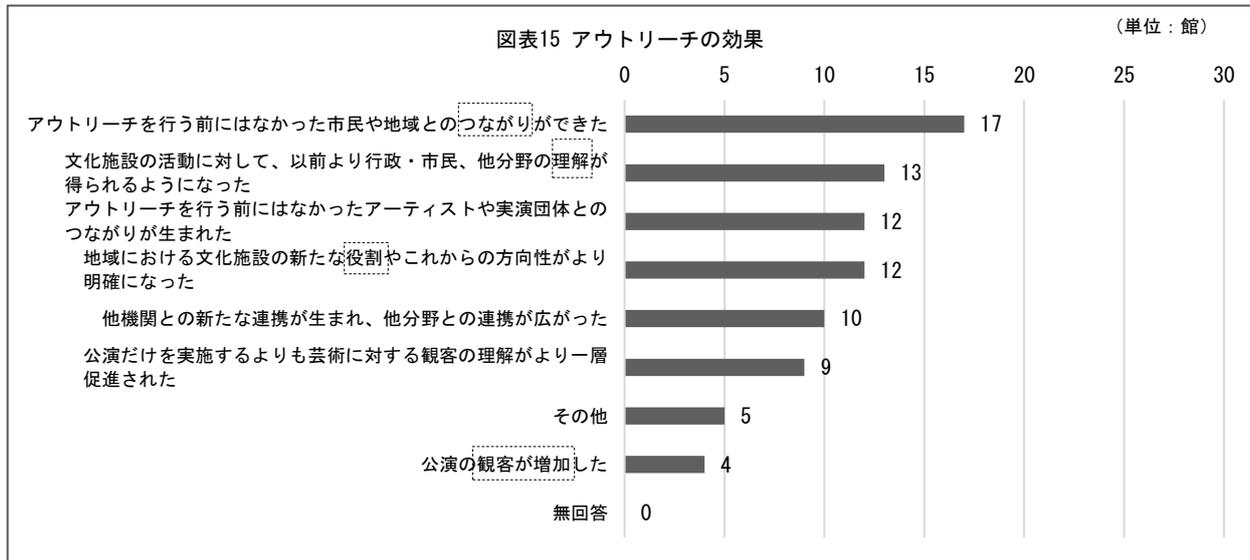
日本のアウトリーチの導入は 2000 年ごろといわれており、欧米に比べると歴史が浅い⁴。前例の踏襲よりも、始まって間もない事業の円滑な運営への意識のほうが高い可能性がある。また実施率の決して高くない事業のため、他の文化施設からの刺激はまだ低い可能性もある。



⁴ 教育に芸術を活用する取り組みは 1990 年代初めごろから欧米諸国で行われるようになり、イギリスの「Creative Partnerships」「Connect」やアメリカの音楽大学による事例が日本にも紹介された（梶田、2011）。

(3) 実施効果

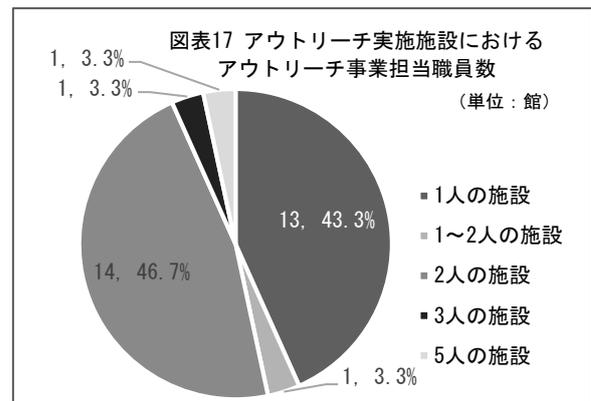
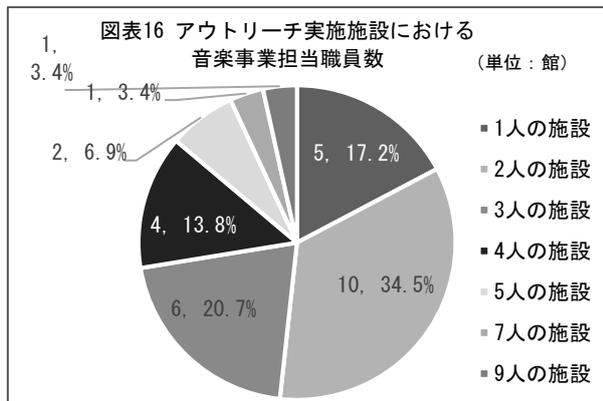
アウトリーチを実施している文化施設の感じている効果の多くを占めるのが、当該地域との関係性に関することである。市民、地域、アーティスト、実演団体とつながり、またそのプロセスにおいて、文化施設の役割が見いだされたり、文化施設の活動そのものに周囲からの理解を得られたりするケースもあるようだ。それに反して、実施理由の66.7%を占めている観客の増加や育成(p.8 図表11)に対する効果はあまり感じられないようだ(13.3%)。



(4) 実施体制

公益社団法人全国公立文化施設協会の調査によると(2017⁵)、文化施設職員数の全国平均は12.48人だが(臨時雇用、清掃・警備等の委託は含まない)、自治体の規模に職員数は比例しており、都道府県で22.8人、政令指定都市で20.86人、10万人以上30万人未満及び30万人以上の市・特別区で10人台、10万人未満の市・特別区と町村では10人を切る。つまり、小さな自治体ほど職員数は少ない。

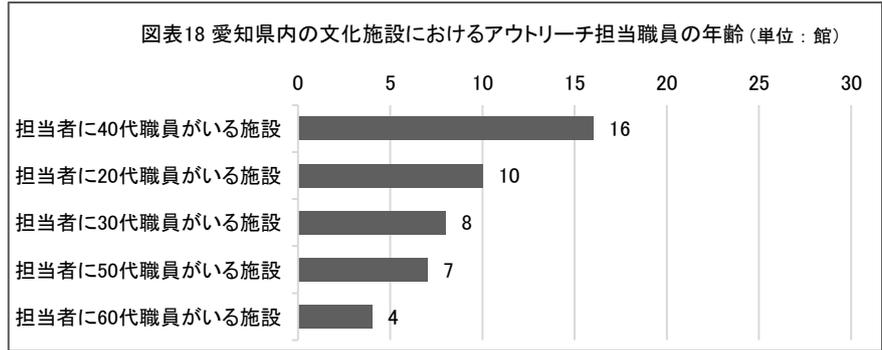
本調査で音楽事業担当者数について尋ねたところ、図表16の結果であった。アウトリーチを実施している30の文化施設のすべてにおいて、音楽事業担当者数は10人未満である。そのうちアウトリーチは、1~2人で担当しているケースがほとんどであり、愛知県内の公立文化施設で音楽のアウトリーチを担当する職員は計51人という結果になった。



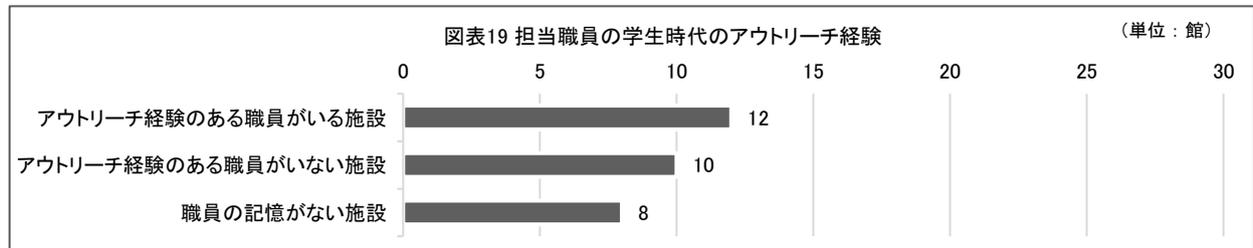
⁵ 「劇場、音楽堂等の活動状況に関する調査報告書」(公益社団法人全国公立文化施設協会、2017、p.43)

(5) 担当職員の属性・経験

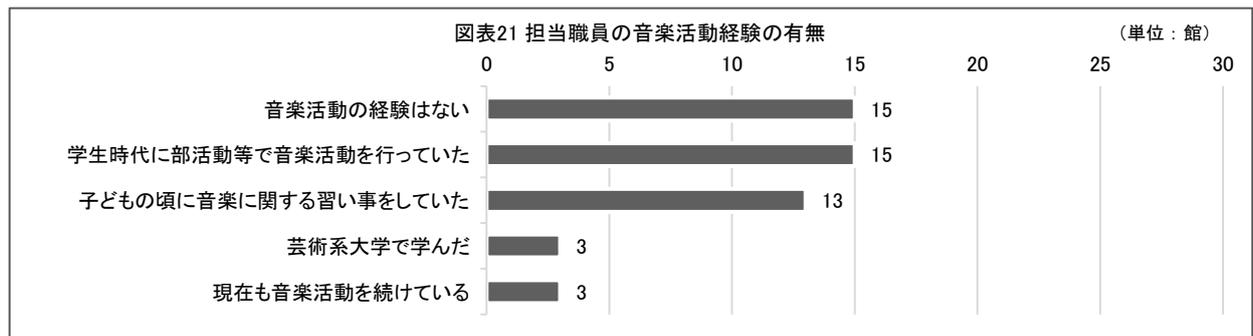
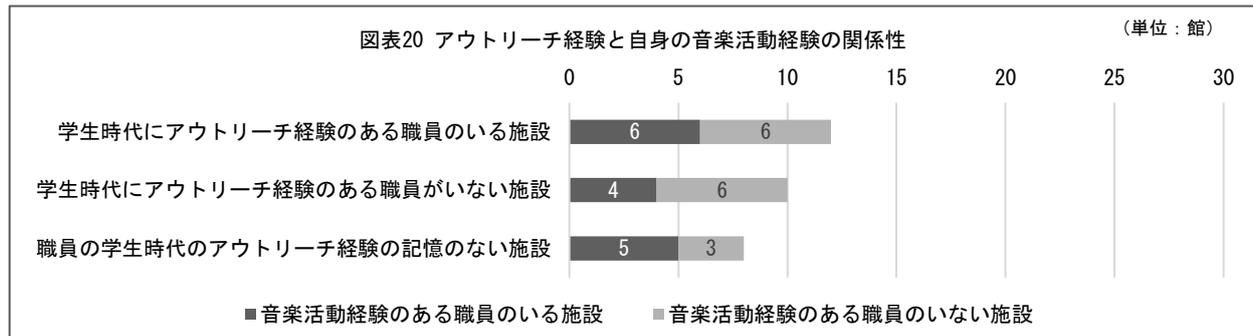
文化施設におけるアウトリーチ担当職員の年齢は図表のとおりである。極端な年代の偏りはなく、アウトリーチの実施と担当職員の年齢の因果関係はないように見受けられる。また、学生時代のアウトリーチ経験の有無も偏りはなく(図表 19)、年齢と同様に、学生時代のアウトリーチ経験とアウトリーチの実施との関係性は強くないことが推測される。



ただ、「学生時代にアウトリーチ経験がある職員がいる」と答えた施設の中には、当該職員の年齢が50代や60代以上の場合もあり、2000年ごろから活発に行われるようになったアウトリーチと、それ以前から頻繁に行われていた「音楽鑑賞教室」との区別が曖昧であることをうかがわせる結果となった。

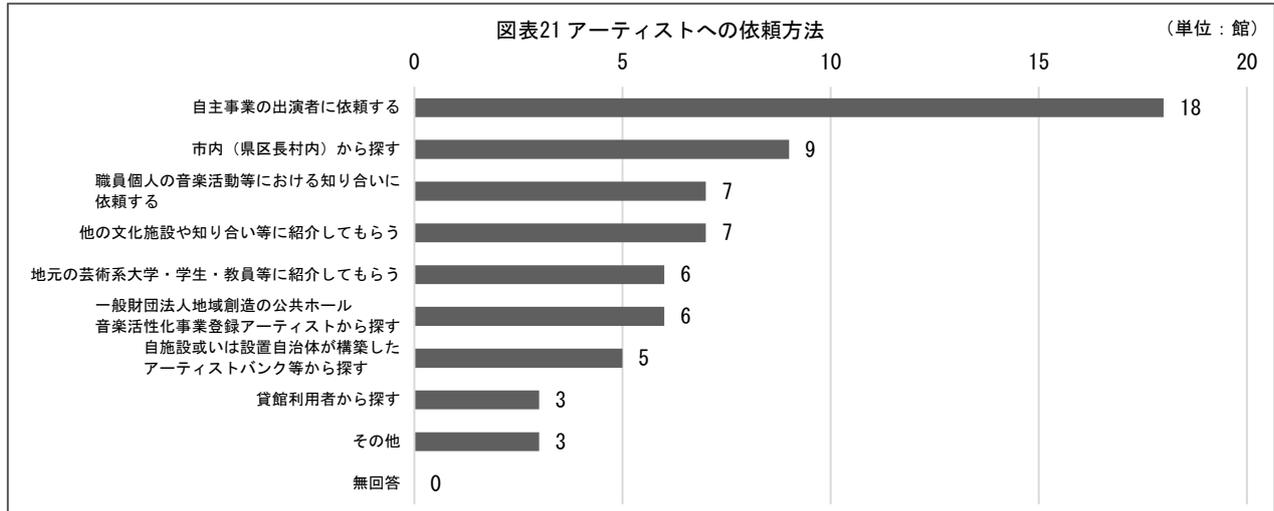


職員自身の音楽活動との関係性については、子どもの頃の習い事や学生時代のサークル、芸術系大学での学び、現在継続中の活動と、多様な関わり方の職員がいることがわかったが、音楽経験のない職員がアウトリーチを実施している施設も15館あり、職員の音楽活動もアウトリーチの実施との強い関係性は見受けられないことがわかった。また、音楽活動経験も学生時代のアウトリーチ経験もない職員のいる施設も6館あり、職員の個人的経験のアウトリーチ実施への影響は、強いくはないと思われる。



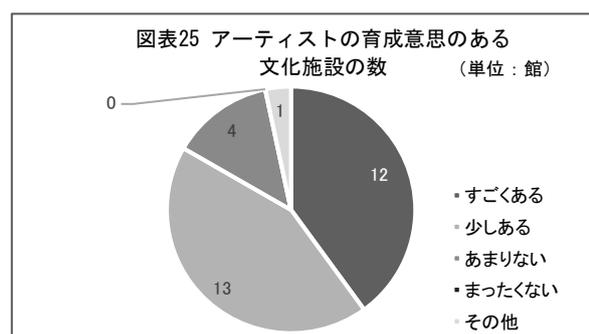
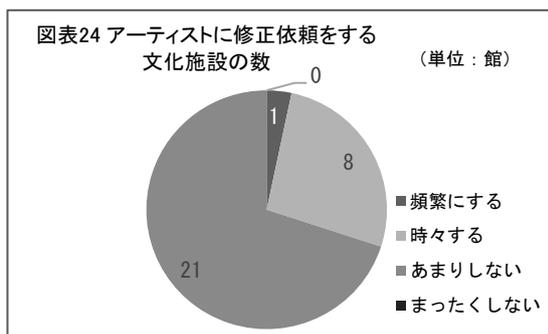
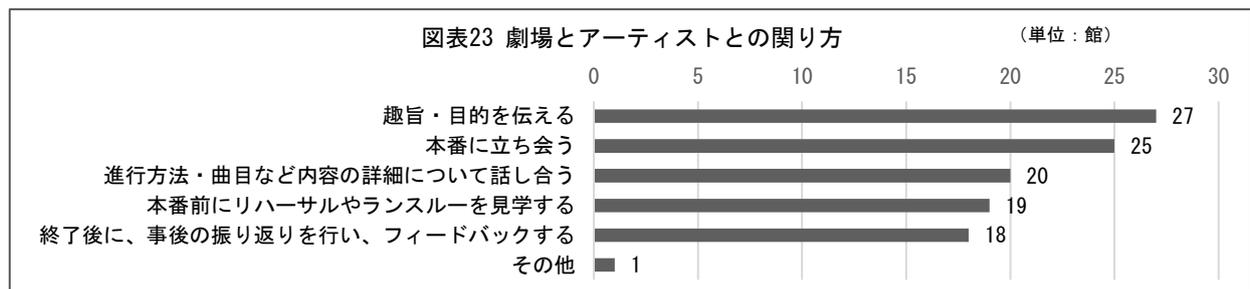
(6) アーティストとの関りについて

アウトリーチで重要な役割を果たす人材にアーティストがいる。子どもたちに演奏を提供するだけでなく、会話を通してコミュニケーションをとったり、ワークショップでは子どもたちと共に考えたり共同作業をしたりする。そのアーティストをどのように起用しているのかについてまとめたグラフが図表 22 である。「自主事業の出演者に依頼する」文化施設がもっとも多いことから、アウトリーチのみを依頼するのではなく、他の事業においての実績や信頼がベースにあることが推測される。その他の回答には「貸館利用者から探す」以外は優位な差は見られない。

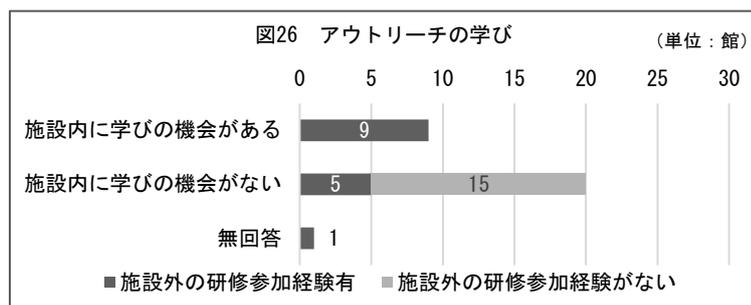


また、依頼した後のアーティストとの関係性は、事業当日のみならず、事前から事後まで積極的にコミュニケーションをとろうとする施設の姿勢がうかがえる結果であった。また、アーティストの意向や内容の仕上がりにも目を向けたり、事後の振り返りを共有したりするなど、内容や質、効果も共有しようとする姿勢が推測される結果となった。また、アーティスト育成意思について「すごくある」「少しある」と答えた施設が 30 館中 25 館に及び、高い割合で育成への意欲があることがわかった。このことが文化施設とアーティストとのコミュニケーションを支えている要因である可能性も考えられる。

一方では、アーティストに対して内容(曲目、構成、司会等)の修正を頻繁にする文化施設は 1 館のみであり、育成意思がありコミュニケーションを積極的に図るものの、修正依頼をするほどの親密な状態ではないこともわかった。



(7) アウトリーチを学ぶ機会



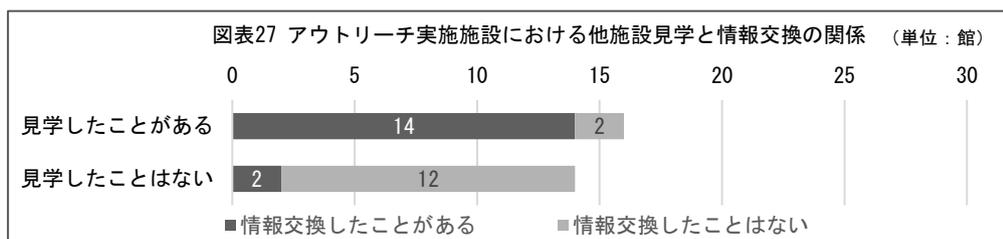
アウトリーチは舞台公演とは異なるノウハウが文化施設職員に求められる。そのため学びの機会について、施設内での学びの機会(OJTを除く)の有無と、施設外の研修参加の有無についてまとめた。文化施設内での学びとは、職員研修などを指す。

その結果、文化施設内外のどちらかで学んでいる施設は14施設あったものの、半数の15施設は学びの機会がない状態でアウトリーチを実施していることが分かった。尚、施設内に学びの機会のある文化施設のすべてが、施設外の研修に参加していた。

(8) 文化施設間の交流

文化施設ごとの違いは個別の事情があるが、愛知県公立文化施設協議会では加入全施設を対象とした愛公文セミナーがある。このような機会における文化施設間の交流が、アウトリーチに何らかの影響をもたらしていることも考えられる。他館のアウトリーチの見学や情報交換の状況についてまとめたものが図表27である。

この結果からは、見学の有無に大きな違いはないものの、見学と情報交換との相関性は高く、「見学したことがある」文化施設は互



いに現状をオープンにし、さらに情報を共有しようとしている傾向の強いことがわかった。

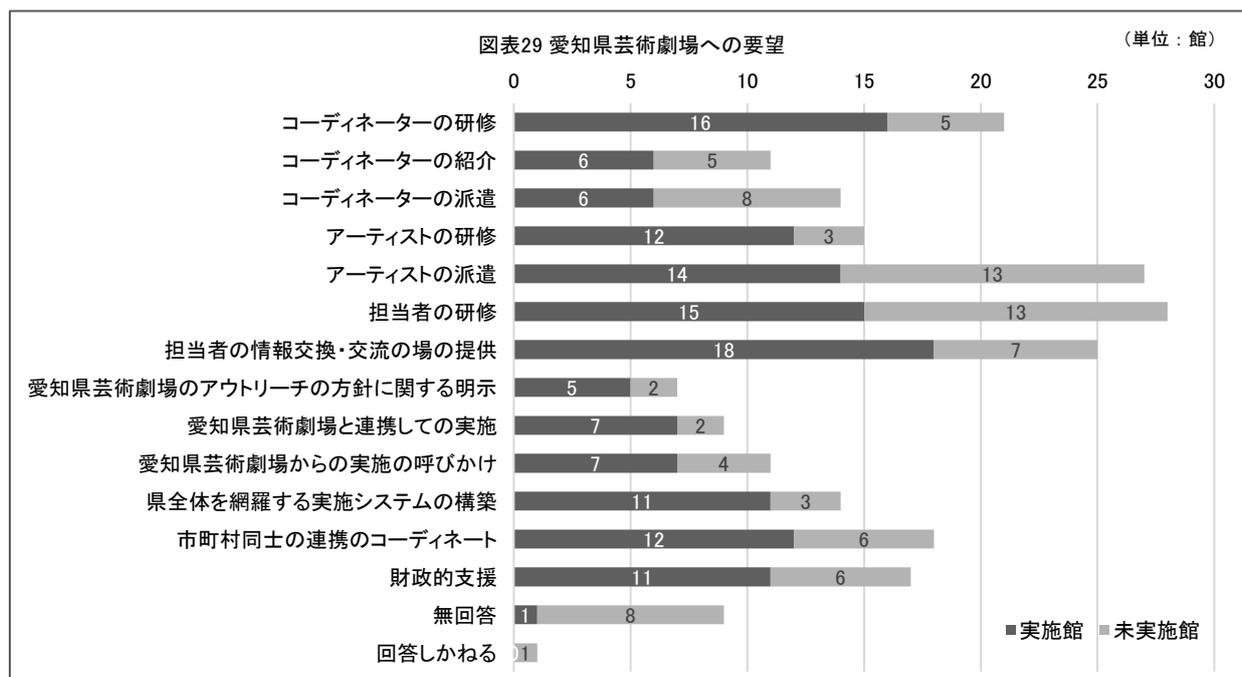
この結果から、文化施設間の交流がアウトリーチにおいて少なからず影響をもたらしている可能性が考えられるため、アウトリーチを実施していない文化施設の状況もまとめた。



(9) 愛知県芸術劇場への要望

これまでの調査結果からは、地域との関りへの意欲や、地域の様々な立場の人との交流がアウトリーチの実施に好影響があるのではないかとわかってきた。事業費や聴衆開拓に対する日頃の苦労は多いが、地域の文化機関としての責務を果たそうという意欲の強さが、アウトリーチを継続させるように感じられる。その上で、今後、アウトリーチにおいて拠点劇場としての機能を愛知県芸術劇場が果たしていく場合、具体的にどのようなことが必要となるのだろうか。

各文化施設からのニーズを示したものが図表 29 である。アウトリーチ実施の有無にかかわらず数多くの文化施設が望んでいるのは、「アーティストの派遣」「担当者の派遣」「担当者の情報交換・交流の場の提供」である。これらのうち「アーティストの派遣」と「担当者の派遣」は実施館も未実施館も同様に希望しており、自主事業の出演者や域内居住アーティスト、他施設や芸術系大学からの紹介が中心となっている現状の困難さがうかがえる。また、「担当者の情報交換・交流の場の提供」を実施施設が多く望んでいることから、情報交換や交流などの開かれた場がアウトリーチ実施に際して有効な機能を果たしていることが推測される。また、実施館においては「コーディネーターの研修」を要望する施設も多く、実施先との調整に労苦を伴っていることが推測される。



2.3 考察 —愛知県内のアウトリーチに関する課題—

愛知県内のアウトリーチ実施率が 50%に迫るという実態は、県内の文化施設の日頃の活動がコミュニティーに密着していることの表れであろう。またそこから推測されるのは、コミュニティーからの支持の厚さである。しかしながら、実施頻度にばらつきがあったり、アーティストとの関係性に濃淡があったりするなど、文化施設の状況は様々だ。また、半数以上の文化施設はアウトリーチを実施していないことにも着目しておく必要はある。

本項では、調査結果から抽出された愛知県内のアウトリーチの課題を挙げる。

(1) 文化施設間交流の格差

アウトリーチを実施している施設において、人口規模、職員の年齢、性別、アウトリーチ経験、自身の音楽経験による偏りはあまり見受けられなかったが、大きく偏りが出たのは、他施設への見学、他施設との情報交換である。

他施設への見学については、アウトリーチ実施施設では 51.7%が行っているのに対し、アウトリーチ未実施施設は 19.3%である。また、アウトリーチ実施施設のうちの 51.7%が情報交換を行っているのに対し、未実施施設では 6.5%と著しく低い。情報交換は、アウトリーチ見学経験のある文化施設の 86.7%が行っていることから、見学と情報交換の相関性は高い。見学と情報交換の効果の高さは、アウトリーチ実施施設の 60.0%が愛知県芸術劇場に「担当者の情報交換・交流の場の提供」を要望していることからわかる。

(2) 文化施設とアーティストの希薄な関係性

本調査では、アウトリーチという特殊性の高い事業において、事業の質に大きく影響するアーティストと事業を実施する文化施設との関係性について、興味深い結果が出た(図表 23～25)。

アーティストとの関わり方において、実施施設のほとんどがアーティスト育成の意志を持った上で(図表 25)、積極的な関わり方をしているものの(図表 23)、アーティストの考案したプログラムへの修正依頼を頻繁にするのは1施設のみにとどまり、75.8%にあたる 22 施設が「あまりしない」という結果であった。このことから、文化施設とアーティストの関係性が仕事の授受にとどまり、交流の域に達していないことが推測される。地域固有、実施先固有の事情に合わせて創意工夫された企画立案が求められるアウトリーチにおいては望ましい状態とは言えない。この課題を克服するためには、両者をつなぐコーディネーターのような役回りを担う人材が求められることになる。

これまでは、コーディネーターと言えば実施先の開拓や調整、当日運営など、施設内の事業では発生しない業務の担当者として認識されてきた。しかし、今後は、アーティストの心情や現状を理解し、なおかつ、文化施設の今日的課題や事情も理解した上で、両者の関係性を深化させられる、いわば「アーティストを開くコーディネーター」「地域を開くコーディネーター」が求められる。

3. 愛知県芸術劇場による試行的実施

—アウトリーチフォーラム事業 愛知セッション—

本章は、愛知県芸術劇場・一般財団法人地域創造主催で 2016 年度～2017 年度にかけて実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 愛知セッション」(以下「フォーラム事業」という。)について述べる。この事業は、愛知県芸術劇場が県内のアウトリーチを展開するにあたり、拠点劇場としての具体的なノウハウと職員の経験の充足を目的として行われたものである。

一般財団法人地域創造はアウトリーチフォーラム事業について、「都道府県との共催により研修会や域内市町村でのアウトリーチ、コンサートなどの事業を実施することで、アウトリーチの手法及びアウトリーチによる事業展開の普及を目指します。また、この事業の実施を通じて、都道府県等へノウハウの蓄積を図るとともに、公共ホールと住民との新たな関係づくりや地元音楽関係者とのネットワークづくりを行います」と説明している⁶。これを実現させるために、都道府県に一般財団法人地域創造依頼のコーディネーターと、アウトリーチフォーラム事業のためにオーディションで選抜されたアーティストを派遣し、市町村のアウトリーチ担当者を交えた全体研修を行い、その後、研修で積み上げたノウハウを持ったアーティストが県内市町村にコーディネーターとともに派遣され、複数回のアウトリーチと域内の文化施設で劇場公演を行う、という仕組みになっている。

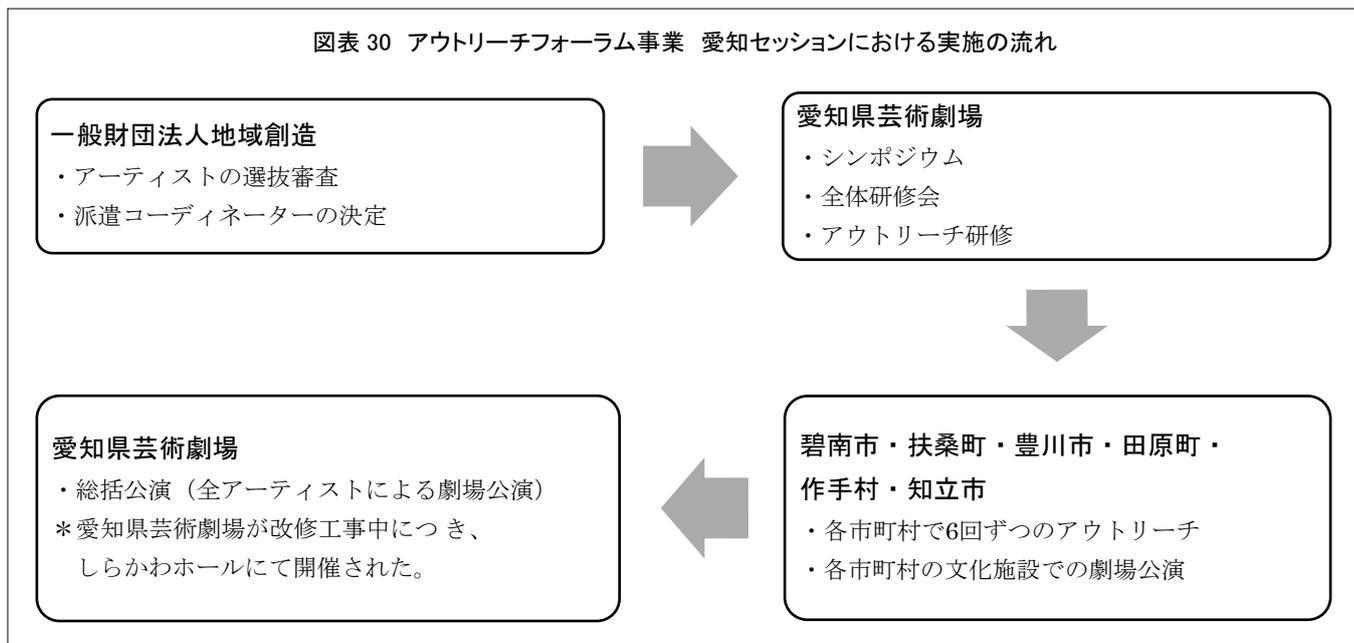
本章では、第 2 章で挙げられた 2 つの課題のうち、アーティストと文化施設担当職員をつなぐコーディネーター(アーティストを開くコーディネーター)の役割に着目したい。

⁶ 一般財団法人地域創造ウェブサイト www.jafra.or.jp/j/guide/independent/music03/index.php に記載。2018 年 11 月 8 日確認。

3.1 概要

(1)関係組織・参加アーティスト・コーディネーター

本事業に参加したのは、碧南市芸術文化ホール（碧南市）、豊川市小坂井文化会館（豊川市）、扶桑文化会館（扶桑町）、つくで交流館（作手村）、パティオ池鯉鮒（知立市）、田原文化会館（田原町）の6施設であった。具体的な実施体制は図表30のようである。フォーラム事業の対象となった市町村立の文化施設は、愛知県芸術劇場からの公募の結果、決定した。



参加アーティストは一般財団法人地域創造によって2016年6月から9月にかけて公募され、書類審査と面接・演奏審査により、図表31に示した3組のアンサンブルが選ばれた。また、各アンサンブルに、コーディネーターとアシスタントコーディネーターがつき、チーフプロデューサーが全体を統括した。

図表 31 公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）

参加アーティスト・コーディネーター

アンサンブル名	構成アーティスト（楽器）	チーフコーディネーター	コーディネーター *アシスタントコーディネーター
Adam (アダム)	山下友教(ソプラノサクソフォン) 田口雄太(アルトサクソフォン) 野原朝宇(テナーサクソフォン) 奥野祐樹(バリトンサクソフォン)	児玉 真	YASSY * 奥田もも子
Trio Minpia (トリオ ミンピア)	水野彰子(ピアノ) 新井貴盛(ヴァイオリン) 黒川美咲(チェロ)		箕口一美 * 酒井雅代
Les Vants Japonais (レ ヴァン)	山内信英(フルート) 久保一麻(オーボエ)		根間安代 * 丹羽 梓

ジャポネ)	川越あさみ(クラリネット) 竹下未来菜(ファゴット) 加治祐子(ホルン)		
-------	--	--	--

(2)実施内容

アウトリーチフォーラム事業の主たる内容は、各アンサンブルがコーディネーター及びアシスタントコーディネーターの助言を受けながらアウトリーチのプログラムを創ること(①アウトリーチ研修)、そのプログラムでアウトリーチフォーラム事業参加施設のある市町村でアウトリーチを行うこと(②アウトリーチの実践)、フォーラム事業に参加している文化施設で劇場公演を行うこと(③劇場公演)の3つに分けられる。

① アウトリーチ研修 (2016年7月9日～7月14日)

研修会場となった愛知県芸術劇場は、各アンサンブルに大リハーサル室、中リハーサル室、リハーサル室臨時楽屋を9時～21時まで開放し、各アンサンブルは同劇場近隣のホテルに宿泊した。そして研修期間の最後には、愛知県芸術劇場近隣の小学校4校へのアウトリーチが試行的に行われた。

図表 32 公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション (2016-2017)

アウトリーチ研修内容

日程	内容	場所
7月9日(日)	・開講式 ・アンサンブルごとにプログラム創り ・全体交流会	愛知県芸術劇場内
7月10日(月)	・アンサンブルごとにプログラム創り	愛知県芸術劇場内
7月11日(火)	・アンサンブルごとにプログラム創り	愛知県芸術劇場内
7月12日(水)	・アンサンブルごとにプログラム創り ・ランスルー	愛知県芸術劇場内
7月13日(木)	・愛知県芸術劇場近隣小学校へのアウトリーチ1回目	名古屋市立A小学校
7月14日(金)	・愛知県芸術劇場近隣小学校へのアウトリーチ2回目 ・座談会 ・閉講式	名古屋市立B～D小学校

② アウトリーチの実践

アウトリーチフォーラム事業参加施設のある市町村へのアウトリーチは、実施先に合わせた日程が選択された。

図表 33 公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション (2016-2017)

アウトリーチスケジュール

アンサンブル名		日にち	実施先	対象者
Les Vants Japonais (レ ヴァン ジャポネ)	1	2016年9月27日	作手村立作手中学校	中学校3年生
	2		作手村立作手小学校	小学校3・4年生
	3	2016年9月28日	作手村立作手中学校	中学校2年生
	4		作手村立作手小学校	小学校2・5年生
	5	2016年9月29日	作手村立作手中学校	中学校1年生

	6		作手村立作手小学校	小学校1・6年生
	1	2016年10月25日	田原市立田原中部小学校	小学校4年生
	2	2016年10月26日	田原市衣笠小学校	
	3	2016年10月27日	田原市立童裏小学校	
Adam (アダム)	1	2016年11月8日	知立市立猿渡小学校	小学校4年生
	2	2016年11月9日	安城特別支援学校	中等部・高等部
	3	2016年11月10日	桜木幼稚園	年長児
	4		徳風保育園	
	1	2016年11月29日	扶桑町立山名小学校	小学校3年生
	2			小学校4年生
	3	2016年11月30日		小学校6年生
	4	2016年12月1日		小学校5年生
Trio Minpia (トリオ ミンピア)	1	2017年1月17日	碧南市立鷺塚小学校	小学校4年生
	2	2017年1月18日	碧南市立西端小学校	
	3		碧南市立日進小学校	
	4	2017年1月19日	碧南市立棚尾小学校	
	1	2017年1月24日	豊川市立代田小学校	小学校5年生
	2	2017年1月25日	豊川市立千両小学校	小学校4～5年生
	3		豊川市立一宮東部小学校	小学校6年生
	4	2017年1月26日	豊川市立牛久保小学校	小学校4年生

③ 劇場公演

アウトリーチ事業の後、すぐに劇場公演が行われた。

図表 34 公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）劇場公演

アンサンブル名	日にち	劇場
Les Vants Japonais (レ ヴァン ジャポネ)	2016年9月30日	つくで交流館
	2016年10月28日	田原文化会館
Adam (アダム)	2016年11月11日	パティオ池鯉鮒 花しょうぶホール
	2016年12月2日	扶桑文化会館
Trio Minpia (トリオ ミンピア)	2017年1月20日	碧南市芸術文化ホール
	2017年1月27日	小坂井文化会館

3.2 専門人材の意識

フォーラム事業では、アウトリーチで重要な役割を果たす専門人材同士が、密接な関係性を構築しながら研修が行われた。それぞれの人材の意識についてヒアリングを行った。

(1) コーディネーター

① チーフコーディネーター：児玉 真

アーティストの力 とにかく僕は、「アーティストオリエンテッド」ということなんです。アーティストの力を信じていて、台本を創りあげてそれを重ねていくのではなく、彼らの力を教育現場で活かす、ということ意識しています。

そして、アーティストに社会で自立していてもらいたいのです。最近、アーティストたちも「社会と関わりたい」という意識が向上してきていると感じているので、それは素晴らしいことだと思います。これまでの先輩アーティストたちからの継承でもありますよね。

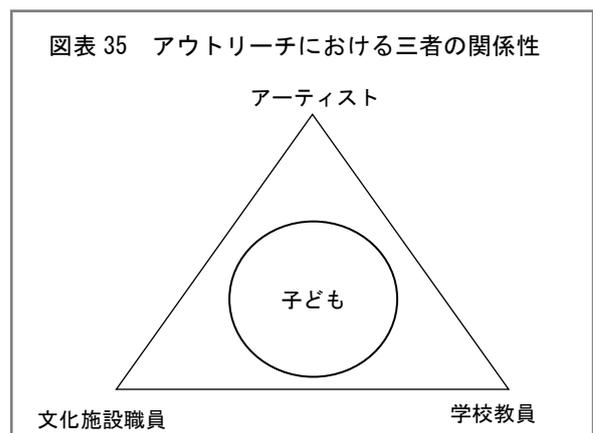
劇場の 20 年 社会とのつながりを持たなくては、という意識は劇場も高くなったと思いますが、さらに活性化するためには、県の果たすべき役割が大きいと思います。市町村が参考にできるようなノウハウを県が備えて、市町村の劇場と手を組んでいくべきでしょう。また、地域交流を担当するセクションを財団などの運営主体の中に置き、劇場のプロデューサーや地域の施設とのコーディネート力のあるアーティストがアウトリーチを進めていくと良いなと思っています。

コーディネーターの心得 アーティストを道具にしないで、アーティストの希望を理解しようとする精神性が何よりも重要だと感じています。アウトリーチはアートと社会をつなぐものだけれど、そのどちらにも引き寄せないように心がけなくてはなりません。アーティストの能力を社会課題に結びつけるけれども、1 つの課題のみに限定するのではなく、社会のあらゆる課題に目を向けられる汎用性が持てるような刺激が良いですね。対象者が想像力を働かせられる時間を提供することに幸せを感じられることが重要です。

三者の関係性 一方で、アーティストに寄り添うことは必要ですが、実は、学校へのアウトリーチの場合、子どもを取り巻く三者が対等な関係性を結ぶことも必要です。この三者のどこに傾いてもよくない。各々が専門性を駆使しながら、子どもにとってもっとも望ましいことを考えていくことが重要です。文化施設の職員がアーティストに対して、引きすぎない態度で接することができれば、コーディネーターの役割を文化施設の職員ができるはずです。

求められる「場」 そのためにも、今一番必要なものは、関係者がざっくばらんに語り合える「場」だと思っています。思ったこと、やってみたいこと、できなかったこと、そこから考えたことなど、何でも話し合える「場」です。そのような「場」ができていくと、自然に新しい道が見えてくるのだと思います。

僕は、愛知県には期待しているのです。日本の中央に位置して、近隣の三重県や静岡県、岐阜県とも近い。愛知県が拠点になると、その周辺まで影響があると思うのです。



* 児玉氏のヒアリングをもとに梶田作成

② コーディネーター：箕口一美

アーティストとの関わり方 アーティスト側から何か出てくるのを待ちたいと思っています。トリオミンピアの 3 人がそろったら何が出てくるのだろう、ということをとにかく待ちます。自分は芸術系大学の教員でもあるので、卒業生が生きていけるように努力をする義務もあります。大学では、在学中に様々な気づきを与えるのが仕事だと考えています。アーティストの将来像に、演奏家＋コーディネーターというものもありだと知ってほしいですね。

子どもたちに伝えたいこと まずは、アーティストという仕事を知ってもらいたいです。本気で 1 つのことを続けるということがとても尊いことであるということ、これを伝えたいと考えています。そして、自分たちのコミュニティの中に文化があるということを知り、他者を認めるという習慣を身に付けてほしいと思います。

③ コーディネーター：根間安代

音楽の力 音楽の力を信じています。ただ、最近アウトリーチにおいて、音楽以外の開発に力が置かれすぎていて、そのことは心配です。

子どもたちへの視線 クラシックに親しむということが、ハイアートに近づいたのだ、という自己肯定感につながっているのではないかと感じています。そこに達するには、プログラムを通して何を伝えたいのか、何を感じてほしい

のかをアーティストが常に考え、(自分は)指導者になりすぎない、リードしすぎないという姿勢が重要だと思っています。

④ コーディネーター：YASSY

子どもへの視線 その子どもたちの心の底にある何かを輝かせることが僕らの仕事だと思うんです。それっておもしろいんですよね。心の扉を開けて去っていくのがアウトリーチ。「空気を吸ってごらん！」「おいしいと思ってごらん！」といえば、教室も沖縄の海になるんですよね。みんなで愉快地にその時間を過ごしたいと願っています。

アーティストの関わり方 目の前にいる子どもは嘘がわかるから、アーティストの中に嘘が見えたときはコメントしますが、基本的には自由にしてもらいたいです。「日本一を目指そう」「2分で空気を換えよう」とは言い続けますけど。子どもに嘘をつきたくないから、とにかく直感を磨いて、リラックスして臨んでもらいたいです。

(2) アーティスト

① トリオ・ミンピア

応募のきっかけ 色々な施設で演奏する機会がこれまでありました。音楽が身近ではない人たちに提供したり、ホスピスで“動けない人”に提供したこともあり、その経験はとても印象に残っています。そのような経験があったり、後輩のアーティストたちがアウトリーチをしているのを見て良いなと思ってこのフォーラムに参加しました。

アウトリーチを創るプロセス ブレスト(ブレーションディング)がとてもおもしろいと思います。思っていることを視覚化していくことですね。「今」の段階での目的が明確になっていくことはとても良い。それらを集結して、子どもたちと「音楽って良いな」という思いを共有したいんです。

② レ・ヴァン・ジャポネ

何のための音楽か? ボランティアとしてアジアに演奏に行ったときに、痛烈に感じたのは「ただやっているだけで良いのか?」ということです。日頃のステージでの演奏に比べて客席が近い距離だったので、聴いてくださる方の表情の変化がよくわかり、そのことがきっかけでアウトリーチに関心を持ちました。オーケストラの仕事が多かったのですが、小編成の場が増え動きが身軽になり、仕事の場が広がりました。

③ Adam

子どもたちに見せたかったもの 曲の良さを伝えるのではなく、曲を通して見えるものを大切にしたいと思っています。伝えたかったのは、人生の見通しになるようなこと、自分を変えるきっかけになるようなことです。サックスは僕らにとってもっとも表現しやすいものであり、アイデンティティー、自分らしさだから、自分たちにしかできないことで伝えたいと思っています。

エンターテインメント性 音楽を糸口に関心を見せるための方法として、楽曲分析ではないやり方、エンターテインメント性を重視してやる方法があると思っています。ただ、それで良いのかなという不安もありました。それを「いいんじゃない?」とやって背中を押してくれたのがコーディネーターです。自分たちのやりたいことを、いつもプラスに受け止めてくれました。

(3) 分析

【コーディネーター】

図表 36 コーディネーターの語り

カテゴリー	キーセンテンス	新たなカテゴリー
アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> ・アーティストの力、能力 ・力を教育現場で活かす ・アーティストから何かが出てくる ・アーティストの希望 ・社会で自立していてもらいたい ・演奏家+コーディネーターもあり ・心の底にある何かを輝かせる仕事 	<p>アーティストへの信頼</p> <p>アーティスト中心</p> <p>アーティストのキャリア設計への意識</p>
対象者	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイアートに近づいたという自己肯定感 ・想像力を働かせられる時間の提供 ・子どもは嘘をつかない ・他者を認める習慣を身に付けてほしい ・アーティストという仕事を知ってもらいたい ・地域に文化があることを知ってほしい 	<p>子どもの発達理解</p> <p>子どもの視野</p> <p>子どもの地域理解</p>
劇場	<ul style="list-style-type: none"> ・社会とのつながりを意識は高くなった ・県の果たすべき役割が大きい ・地域交流セクションの設置 	<p>劇場の変化</p> <p>拠点機能の指摘</p> <p>体制への助言</p>
コーディネーター	<ul style="list-style-type: none"> ・アーティストオリエンテッドということ ・アーティスト側から何か出てくるのを待ちたい ・指導者になりすぎない、リードしすぎないという姿勢が重要 ・基本的には自由にしていてもらいたい 	<p>アーティスト中心</p>

【アーティスト】

図表 37 アーティストの語り

カテゴリー	キーセンテンス	新たなカテゴリー
経験からの 思い	<ul style="list-style-type: none"> ・身近ではない人々たちに提供したことや“動けない人”に提供した経験が印象に残っている。 ・痛烈に感じたのは、「ただやっているだけで良いのか？」ということ 	<p>視野の広がり</p> <p>日常への疑問</p>
プロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレスト(思っていることの可視化)がおもしろい ・不安があったけれど、背中を押してくれたのがコーディネーターだった。 	<p>自身の理解</p> <p>不安の払拭</p>
伝えたい こと	<ul style="list-style-type: none"> ・「音楽って良いな」を共有したい ・音楽の先にあること(人生の見通し、自分を変えるきっかけになること)を伝えたい 	<p>コンテンツへの親しみ</p> <p>対象者自身へのフィードバック</p>

これらをまとめると、フォーラム事業で両者の関係性には次の3点が介在していたと考えられる。

- ① コーディネーターとアーティストの信頼関係を基盤として、アーティスト中心に進めている
- ② コーディネーターは対象者理解をした上で、アーティストと「伝えたいこと」を共有している。
- ③ コーディネーターはアーティストのキャリア構築としてアウトリーチを認識している。

3.3 考察

当然のことではあるが、「音楽の力」を信じるアーティストを理解し尊重するコーディネーターとアーティストの強固な関係が、アウトリーチ実施の基盤となっていた。このことは、第1章で明らかになった、アーティストと文化施設の関係性の希薄さという現状から見ると、目指すべきモデルといえるだろう。信頼関係が基盤にあることより、アーティストへの修正依頼は頻繁に行われ、対象者(子ども)理解もコーディネーターからアーティストに頻繁に促されていた。また、研修では、アウトリーチを実施する予定の文化施設職員が同席し、地域に関する情報提供を行うようにコーディネーターが促していた。

しかしながら、文化施設がアウトリーチを実施する目的は、図表9や図表12にあるように、「文化施設の役割を考えると公演や演奏会では不十分だから」、「文化施設の活動と地域をより深く結びつけるため」という、地域理解を伴うものも高い割合を占めている。また、劇場は、文化芸術振興基本法制定以後、普及啓発事業に力を入れ、その一環としてアウトリーチを位置づけてきたものの、文化芸術基本法への改定を受けて、文化芸術をそれ以外の政策分野に寄与することに狙いを定める必要が出てきている。この流れは、アウトリーチにも同様の目的を見据えさせることになる。

このような変化に対応するために、アウトリーチフォーラム事業にみるコーディネーターとアーティストとの関係性の特徴から、コーディネーターが持つべき資質には次の5つが考えられる。

- ①アーティストとの一定の距離を保ちながらサポートするコーチング力
- ②アーティストのキャリア設計を支援するカウンセリング力
- ③地域や対象者と音楽を同時に視野に入れることのできる俯瞰力
- ④アーティストに音楽分野の助言ができる音楽的能力
- ⑤アーティストとの交流経験(活動経験を含む)

4. 愛知県芸術劇場の課題 —まとめにかえて—

文化芸術基本法により、文化芸術は、文化芸術そのものの振興に加え、文化芸術以外の政策分野への活用・推進にもつなげていくものとなった。そしてそのフィールドの一つに教育が挙げられている。折しも、2020年度改訂の学習指導要領には「児童が学校内及び公共施設などの学校外における音楽活動とのつながりを意識できるようにするなど、児童や学校、地域の実態に応じ、生活や社会の中の音や音楽と主体的に関わっていくことができるよう配慮すること」と明記された(p.126)⁷。今後、公立文化施設と学校の有機的なつながりは必須となるだろう。劇場から学校への一方通行であった関係性を、今後、学校から劇場への要請をきっかけとした双方向の関係性に発展させていく必要がある。また、福祉分野においても、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が2018年6月に成立し、障がい者の鑑賞機会をこれまで以上に拡大させる努力が公立文化施設にも求められることになる。

⁷ 同様に、中学校学習指導要領解説にも明記されている(p.106)。

このように、文化芸術を取り巻く環境が、文化芸術以外の政策分野を起点としても変化する中、アウトリーチの実施主体である文化施設にはこれまで以上の努力が求められる。特に教育分野においては、実施を第一義としていた時代は終わり、学校が追い求める目的を共有したり、共に学校や児童を取り巻く課題解決に向かっていくなどの踏み込んだアプローチが必要となる。このことはコーディネーターやアーティストの資質・能力及び活動に少なからず影響するはずだ。そして、地域間格差、つまり劇場間格差をなくしていくことはその前提である。

そこで本項では、調査で明らかになった課題に基づいて、愛知県芸術劇場に求められる 3 つの取り組みを次にまとめる。

(1) 人材の育成 —コーディネーターとアーティスト—

愛知県内のアウトリーチ実態調査からは、文化施設職員とアーティストの関係性の希薄さも明らかになった。アーティストとしての能力や資質を「地域」に繋げるためには、文化施設職員が地域課題を熟知した上でアーティストに意見をしたり、修正を依頼したりすることが求められるが、現在はそのような関係性が構築されていないようだ。しかし文化芸術以外の政策分野から文化芸術分野へのアプローチが増加することが予測される現在、アーティストには今後ますます発想の転換や柔軟な思考が求められ、能力をさらに開いていく必要がある。また、文化施設職員は地域や実施場所の事情に加え、他分野の事情を理解し、アーティストに的確な情報や要望を出す必要がある。

このような状況を踏まえると、文化芸術を取り巻く環境の変化に対応するためには、一般財団法人地域創造による「アウトリーチフォーラム愛知セッション」でアーティストの能力を開いていったコーディネーターのような人材を各劇場が獲得しなければならない。そのため愛知県内で活動するコーディネーターを一定数確保するため、愛知県芸術劇場は、コーディネーターの育成に取り組む必要がある。

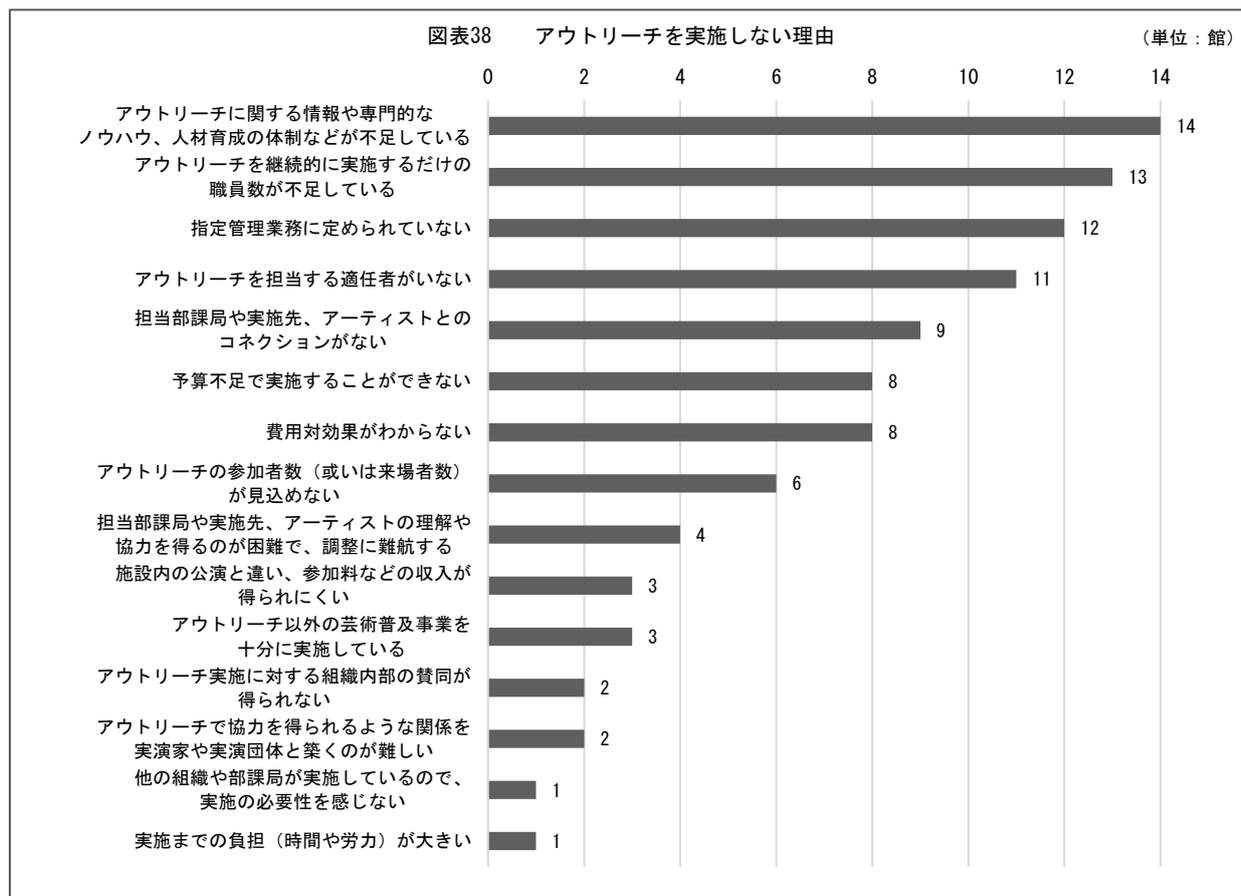
(2) 劇場間連携の強化 ～育成人材活用のためのシステム～

育成されたコーディネーターが県内の各劇場で活動するためには、劇場間ネットワークが基盤となる。既に愛知県内には、愛知県公立文化施設協議会と愛知県芸術劇場が主催するセミナー（愛公文セミナー）等によって交流の機会が提供されたり、愛知県芸術劇場が推進している「市町村連携プロジェクト」による文化施設間ネットワークが存在したりしているが、実際には文化施設間格差が出ている。このことは既存の取り組みがまだ十分ではないことの表れであろう。今後は、より多くの文化施設が相互に交流できる工夫を行い、コーディネーターが県内のアウトリーチを満遍なくサポートできるようなプラットフォームの構築が求められる。

(3) 育成人材の派遣

育成されたコーディネーターがその力を発揮していくためには、愛知県芸術劇場はコーディネーターを各地域に派遣していくことが重要である。そして派遣後には、コーディネーターと劇場職員との十分な話し合い、地域の事情に沿った事前リサーチ、リサーチに基づいた企画制作、アーティスト選定、実施、評価、という一連の流れが実行されていくシステムの構築が求められる。

参考：アウトリーチを実施しない理由（全 31 館中）



参考・引用文献

- 「平成 26 年度 地域の公立文化施設実態調査」(一般財団法人地域創造、2015)
- 「劇場と子ども 7 万人プロジェクト 2017 年度報告書」(愛知県芸術劇場、2018)
- 「転換するアウトリーチ —音楽科教育への貢献—」(梶田美香、2011、名古屋市立大学博士論文)
- 「劇場。音楽堂等の活動状況に関する調査報告書」(公益財団法人全国公立文化施設協会、2017)
- 「小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編」(文部科学省、2017)
- 「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編」(文部科学省、2017)

資料編

愛知県内の公立文化施設における
音楽のアウトリーチに関するアンケート調査

●音楽のアウトリーチの実施状況についてお尋ねします

①貴文化施設では、学校や福祉・医療施設など施設外にアーティスト及び演奏団体が出向いてコンサートやワークショップ等を行う音楽のアウトリーチ活動を行っていますか？

1. 行っている (→③～④) 2. 今までまったく行っていない (→②、⑱～⑳)
3. 行っていたことがあるが今は行っていない (→②、⑱～⑳)

施設内における、芸術普及を目的とした体験型事業【ワークショップ、講座等】や鑑賞型事業

今までまったく行っていない施設： 行っていたことがあるが今は行っていない施設：

②音楽のアウトリーチを行っていない或いは今は行っていないのはどのような理由ですか？

(複数回答可)

○職員に関する理由：

1. アウトリーチを継続的に実施するだけの職員数が不足している。
2. アウトリーチを担当する適任者がいない。
3. アウトリーチに関する情報や専門的なノウハウ、人材育成の体制などが不足している
4. 実施までの負担（時間や労力）が大きい

○組織及び予算に関する理由：

5. アウトリーチ実施に対する組織内部の賛同が得られない
6. 予算不足で実施することができない
7. 施設内の公演と違い、参加料などの収入が得られにくい
8. 費用対効果がわからない
9. 指定管理業務に定められていない
10. 他の組織や部課局が実施しているので、実施の必要性を感じない

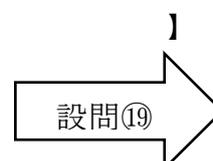
○アウトリーチそのものに関する理由：

11. アウトリーチの参加者数（或いは来場者数）が見込めない
12. アウトリーチ以外の芸術普及事業を十分に実施している

○担当部課局や実施先、アーティストに関する理由：

13. 担当部課局や実施先、アーティストの理解や協力を得るのが困難で、調整に難航する
14. 担当部課局や実施先、アーティストとのコネクションがない
15. アウトリーチで協力を得られるような関係を実演家や実演団体と築くのが難しい

○その他の理由：【



2. 体験しなかった

3. 覚えていない

⑬アウトリーチを担当する職員は、学生時代に部活動等で音楽活動等を行っていた経験或いは芸術系大学で学んだ経験はありますか？また、現在も何らかの形で活動を行っていますか？

(複数回答可)

1. 学生時代に部活動等で音楽活動を行っていた

3. 芸術系大学で学んだ

3. 子どもの頃に音楽に関する習い事をしていた

4. 現在も音楽活動を続けている

5. 音楽活動の経験はない

●アーティストについてお尋ねします

⑭アウトリーチを依頼するアーティストをどのように探していらっしゃいますか？ (複数回答可)

1. 自主事業の出演者に依頼する

2. 市内(県区町村内)から探す

3. 職員個人の音楽活動等における知り合いに依頼する

4. 他の文化施設や知り合い等に紹介してもらう

5. 地元の芸術系大学・学生・教員等に紹介してもらう

6. 貸館利用者から探す

7. 財地域創造の公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト(現在或いは過去の登録者)から探す

8. 自施設或いは設置自治体が構築したアーティストバンク等から探す

9. その他【 】

⑮アウトリーチの際のアーティストとの関わり方について、最近(過去2~3年)の様子を教えてください。(複数回答可)

1. 趣旨・目的を伝える

2. 進行方法・曲目など内容の詳細について話し合う

3. 本番前にリハーサルやランスルーを見学する

4. 本番に立ち会う

5. 終了後に、事後の振り返りを行い、フィードバックする

6. その他【 】

⑯アーティストの準備したアウトリーチの内容に対して修正等の依頼をしますか？

1. 頻繁にする

2. 時々する

3. あまりしない

4. まったくしない

⑰アウトリーチを行うとアーティストは成長する部分も多くあると言われていますが、貴文化施設は「アーティストを育成したい」という意識はお持ちですか？

1. すごくある

2. 少しある

3. あまりない

4. まったくない

●評価についてお尋ねします

⑩アウトリーチの対象となった参加者や来場者にアンケート等を行っていますか？

行っている場合、アンケート結果は、どのように次に活かしていますか？

1. 行っている

活かし方【

】

2. 行っているが活かし方がわからない

3. 行っていない

●設置自治体の法整備についてお尋ねします

⑪貴文化施設の設置主体である市町村には、文化芸術に関する条例或いは文化振興に関する計画（プラン）がありますか？

1. 文化条例がある【平成 年策定】

2. 文化振興計画（プラン）がある【平成 年策定】

3. どちらもない

1、2とお答えの劇場：

自治体の文化条例、或いは文化振興計画（プラン）にアウトリーチに関する記載はありますか？

1. ある

2. ない

●その他

⑫色々な公立文化施設でアウトリーチが行われていますが、他の文化施設で行われるアウトリーチを見学に行ったことはありますか？

1. ある

2. ない

⑬企画や運営について、アウトリーチの活発な文化施設と情報交換等をすることはありますか？

1. ある

2. ない

⑭アウトリーチに関する研修に参加したことがありますか？

1. ある

2. ない

⑮愛知県内には愛知県芸術劇場という大型拠点施設がありますが、アウトリーチに関して愛知県芸術劇場に担って欲しい役割などはありますか？（複数回答可）

○コーディネーターに関する役割：

1. コーディネーターの研修

2. コーディネーターの紹介

3. コーディネーターの派遣

○アーティストに関する役割：

4. アーティストの研修

5. アーティストの派遣

○職員に関する役割：

6. 担当者の研修

7. 担当者の情報交換・交流の場の提供

○基幹劇場としての役割について：

8. 愛知県芸術劇場のアウトリーチに対する方針の明示

9. 愛知県芸術劇場と連携しての実施

10. 愛知県芸術劇場からの実施の呼びかけ

11. 県内全体を網羅する実施システムの構築

12. 市町村同士の連携のコーディネート

13. 財政的支援

その他：

⑭ アウトリーチについて困っていることや悩み、要望等を教えてください。

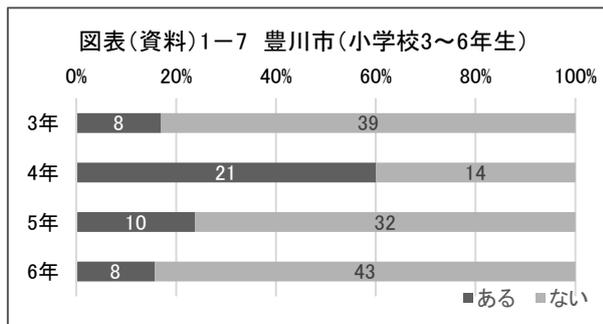
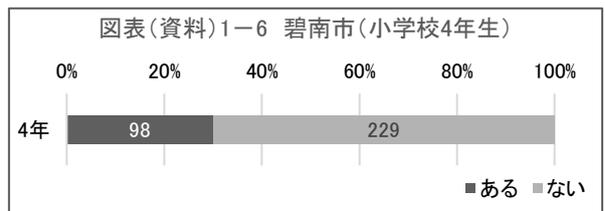
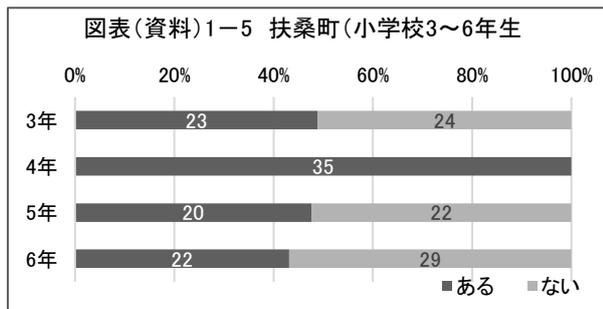
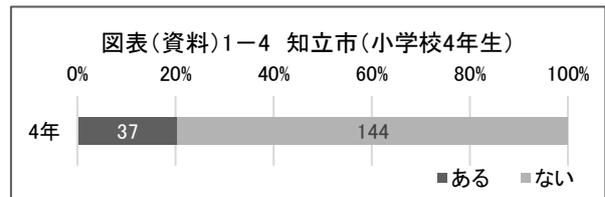
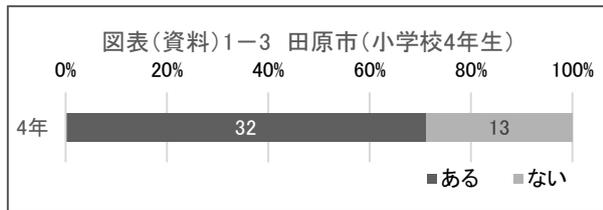
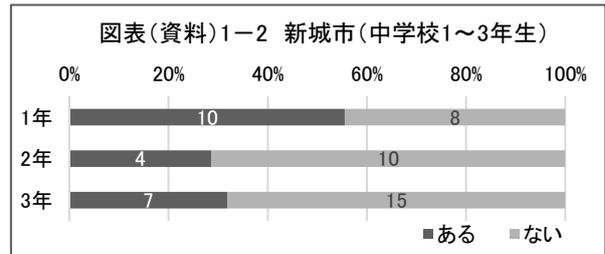
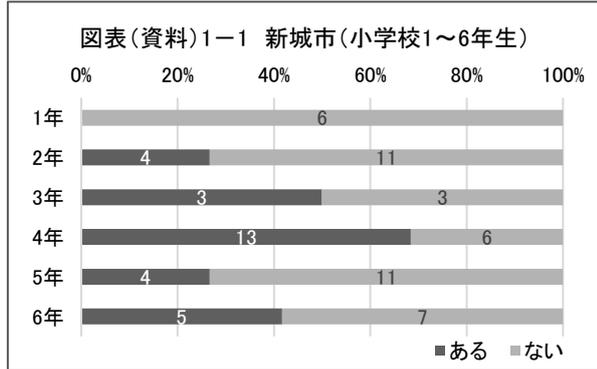
ご協力、ありがとうございました。

アウトリーチフォーラム愛知セッション

参加児童アンケート

●これまでに地元の劇場で、コンサートを歌や楽器の演奏を聴いた経験 (単位：人)

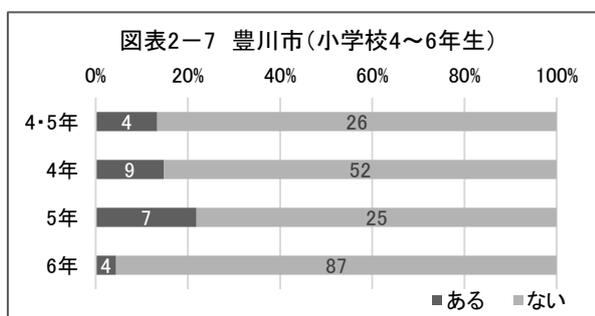
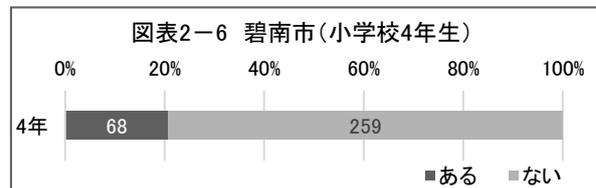
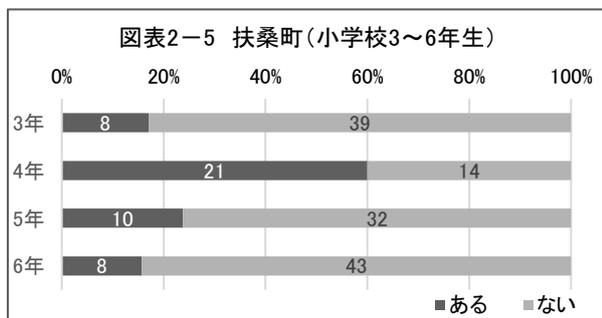
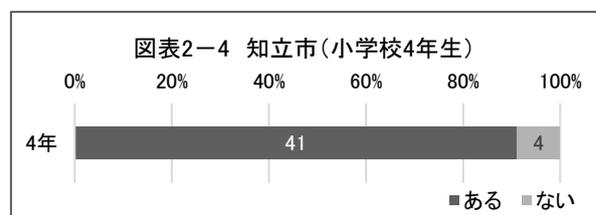
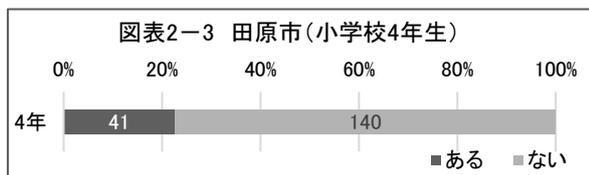
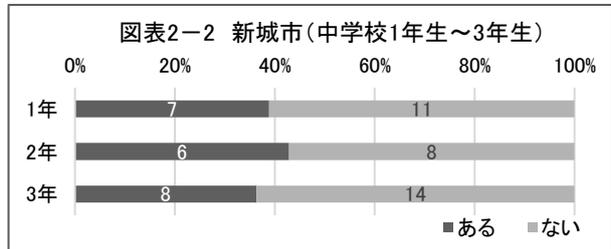
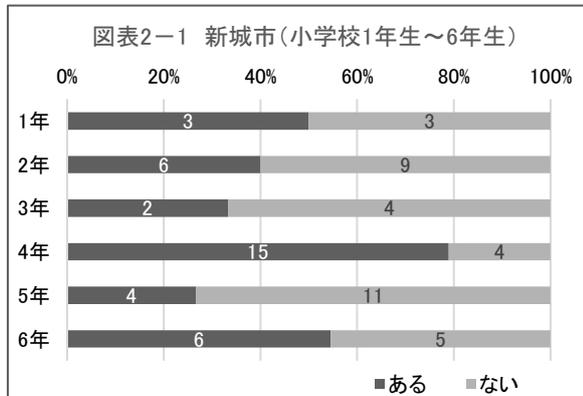
表(資料)1-1~7 アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおける
アウトリーチ参加児童の劇場での鑑賞経験



●これまでに地元の劇場で、歌を歌ったり、楽器を演奏したりして、ステージで発表した経験

(単位：人)

図表（資料）2-1～7 アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおける
アウトリーチ参加児童の芸術活動経験



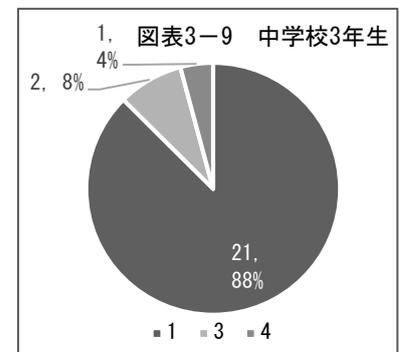
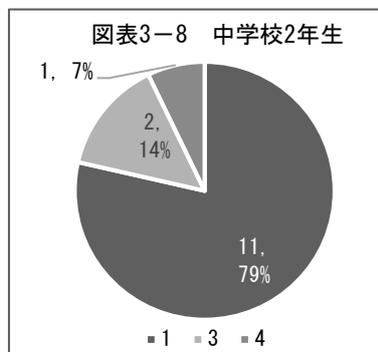
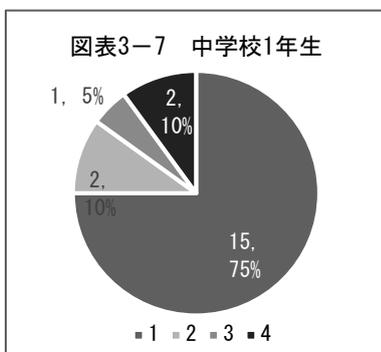
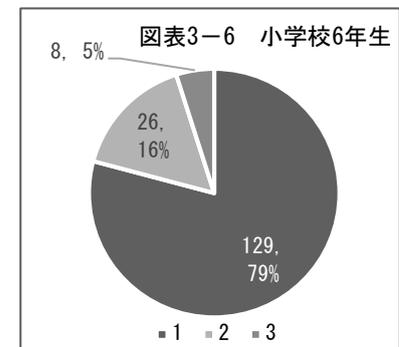
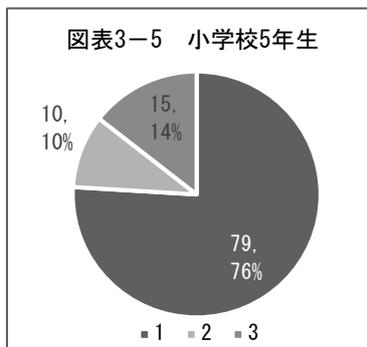
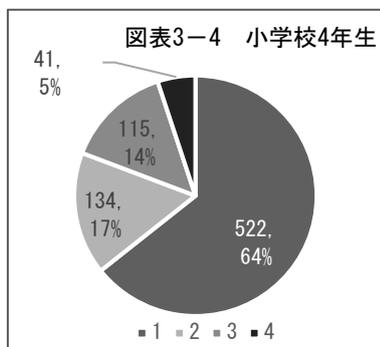
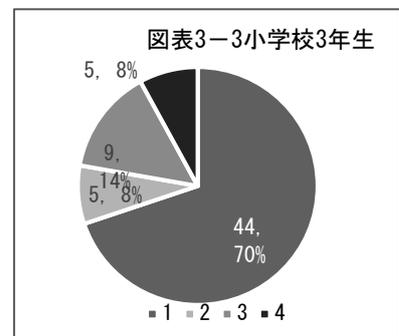
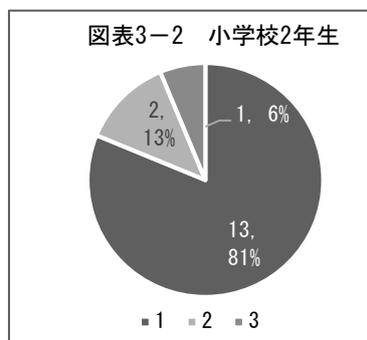
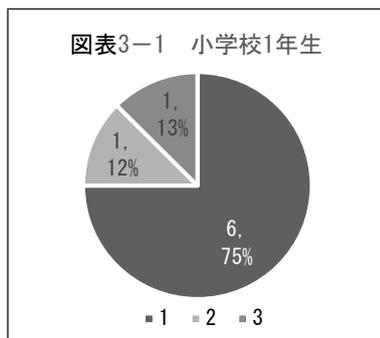
●今日のような「アウトリーチ」がたくさん学校であると、どのような気持ちになると思うか

(単位：人)

*アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおけるアウトリーチ対象児童の合計。但し、未就学児と特別支援学校児童を除く

1. 今までよりも音楽が好きになる
2. これからは、地元の劇場に行ってみたいと思うようになる
3. 大人になったら、音楽の仕事をしてみたいと思うようになる
4. その他

図表（資料）3-1～9 アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおける
アウトリーチ参加児童の感想



図表一覧（本文）

章	章題	ページ	図表番号	図表タイトル
1	はじめに	4	図表 1	アウトリーチの実施率と実施回数
2	文化芸術の普及啓発事業に関する愛知県内の実態調査	5	図表 2	劇場・教育委員会が主催・共催した小・中学生対象の公演の実施状況
		6	図表 3	アンケート回答施設の人口規模
			図表 4	愛知県内のアウトリーチ実施状況
			図表 5	愛知県内のアウトリーチの実施先
			図表 6	愛知県内のアウトリーチの実施率と実施回数
		7	図表 7	愛知県内のアウトリーチ実施数
			図表 8	愛知県内のアウトリーチの開始年度
			図表 9	アウトリーチの実施理由【組織の方針や施設に求められる役割に関すること】
			図表 10	アウトリーチの実施理由【組織運営に関する理由】
		8	図表 11	アウトリーチの実施理由【無関心層開拓に関する理由】
			図表 12	アウトリーチの実施理由【地域や市民とのかかわりに関する理由】
			図表 13	アウトリーチの実施理由【人的理由】
			図表 14	アウトリーチの実施理由【その他の理由】
		9	図表 15	アウトリーチの効果
			図表 16	アウトリーチ実施施設における音楽事業担当職員数
			図表 17	アウトリーチ実施施設におけるアウトリーチ事業担当職員数
		10	図表 18	愛知県内の文化施設の蹴るアウトリーチ担当職員の年齢
			図表 19	担当職員の学生時代のアウトリーチ体験
			図表 20	アウトリーチ経験と自身の音楽活動経験の関係性
			図表 21	担当職員の音楽活動経験の有無
		11	図表 22	アーティストへの依頼方法
			図表 23	劇場とアーティストとの関わり方
			図表 24	アーティストに修正依頼をする文化施設の数
			図表 25	アーティストの育成意思のある文化施設の数
		12	図表 26	アウトリーチを学ぶ機会の有無
			図表 27	アウトリーチ実施施設における他施設見学と情報交換の関係性
			図表 28	アウトリーチ未実施施設における他施設見学と情報交換の関係性
		13	図表 29	愛知県芸術劇場への要望
		4	愛知県芸術劇場による試行的実施 -ア	15

	ウトリーチフォーラム愛知セッションー		図表 31	公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）参加アーティスト・コーディネーター
		16	図表 32	公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）アウトリーチ研修内容
			図表 33	公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）アウトリーチスケジュール
		17	図表 34	公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業愛知セッション（2016-2017）劇場公演
		18	図表 35	アウトリーチにおける三者の関係性
		20	図表 36	コーディネーターの語り
			図表 37	アーティストの語り
		23	図表 38	アウトリーチを実施しない理由

図表一覧（資料）

35	図表（資料）1-1	アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおけるアウトリーチ参加児童の劇場での鑑賞経験
	図表（資料）1-2	
	図表（資料）1-3	
	図表（資料）1-4	
	図表（資料）1-5	
	図表（資料）1-6	
	図表（資料）1-7	
36	図表（資料）2-1	アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおけるアウトリーチ参加児童の劇場での芸術活動経験
	図表（資料）2-2	
	図表（資料）2-3	
	図表（資料）2-4	
	図表（資料）2-5	
	図表（資料）2-6	
	図表（資料）2-7	
37	図表（資料）3-1	アウトリーチフォーラム事業 愛知セッションにおけるアウトリーチ参加児童の感想
	図表（資料）3-2	
	図表（資料）3-3	
	図表（資料）3-4	
	図表（資料）3-5	
	図表（資料）3-6	
	図表（資料）3-7	
	図表（資料）3-8	
	図表（資料）3-9	

調査研究実施体制

研究代表・執筆

梶田美香 名古屋芸術大学（教授）

調査協力

藤井明子 愛知県芸術劇場（チーフマネージャー）

調査補助

山本宗由 愛知県立芸術大学大学院（博士課程）

発行：愛知県芸術劇場

〒461-8525

愛知県名古屋市東区東桜 1-13-2

調査委託：名古屋芸術大学

〒481-8503

北名古屋市熊之庄古井 281

企画・編集：名古屋芸術大学

〒481-8503

北名古屋市熊之庄古井 281

発行年月：2019年3月